

幼稚園教育実習に関する一考察

6月実習 — 短期大学の場合 —

○ 角 尾 和 子
(川村短期大学)

自由活動時の指導について(その1)

野 上 秀 子
(久我山幼稚園)

はじめに

この報告は、本学会発表の第38回第39回に次ぐ継続研究である。従来にひきつづき幼稚園教育実習の受け入れの状況を具体的にしたいと考えている。

昭和59年度から始めた本実習の6月実施は、社会的な諸般の事情からの事であった為、この時期の保育科学生は未熟であること、実習受け入れ幼稚園の様々な対応をめくり、実習指導担当者として様々な問題に直面し、幼稚園での実習指導の実際を具体的に把握し、それを教師養成のカリキュラムに反映させる工夫をしたいと考えて始めたものである。今回は、自由活動時の指導について、教師養成側と幼稚園側とそれぞれの立場から考え合った事柄を一連発表にまとめた。

これまでの経過

38回報告 A.学生の実習体験をもとに実習指導を概観したところ、① 自由活動時間が長い(多い)② 全日実習・部分実習の機会が多い、③ 園のカリキュラム、指導計画について明確な指示が少ない、④ 子供たち、担任教師、園長先生との間に交流の機会が多い程学生の感動は大きい、⑤ その他 の具体的事実がとらえられた。B.部分実習指導にあたり、同一主題でクラスを変えて実施させる園の指導の実際を発表(同一指導計画による実習過程の分析—V T Rを用いた場合)

39回報告 部分実習を参観(短大・筆者)し記録(録音・録画)したもの、学生本人の実習日誌をもとに考察した。①「実習」は園側の保育の流れの中で一部分担する、又は担任等の指示で「実習」のテーマや内容をきめることもあるが、多くは学生自身がそれらの選択を行なっている。そのため学生は対象のクラスに対しての予備的な調査の配慮もなしに、短大でそれまでに学んだものの中から手固く実施しやすいものを取りあげていることに気づいた。“実践の場数を踏ませてよい教師に”という園の配慮から「実習」の機会が多くなるのであろうが、6月という時期の実習はどのように養成側のカリキュラムを準備したらよいか、学生にどのように心構えさせるか、園側への依頼をどのようにするか今後の課題で

ある。②自由活動時について、その時間帯が様々にとられ又時間が長いことをさきにあげた。実習生はこの自由活動時にどのように担任教師から学び、本人自身どのように活動しているか実習生の日誌を調べてみた。それらの中で望ましいと思う記録の一部を取りあげた。筆者は「保育研究」の基本に「幼児理解を臨床的に学ばせる」ことが必要であると常々考えている。その実施のよい機会が、教育実習期間中の“自由活動時”にあると考えたが、協力幼稚園のすべてにそれを求められないこと、学生自身自由活動時の参加に困難を感じていることを、日誌を検討する中で感じた。

本研究の目的及び方法

教育実習生は、実習期間中の(主として)自由活動時にどのような活動をしているか、又どのような学びを得ているか、本学の実習協力園全体(昭和61年度)について概観する。それを背景にして、

保育の実地研究として、幼児理解の臨床的研究として、自由活動時の実習が活かされるために必要な手だてはないか研究する。

方法及び対象は従来通り。上記の目的に沿った調査と学生の教育実習日誌その他のレポートを分析検討する。

今ひとつの方法として、39回の報告にのせたような(昭和60年度の実習生)幼児との遊びに柔軟な対応をする学生をえらび、特に依頼して、共同研究者の園で実習させ、この学生の実習経過について、園側、養成側で目的に迫る話し合いを行なった。

結 果

1. 自由活動時(自由遊び)の活動内容、教師のかかわり方、実習生に対する指導が、各園、各人によって様々であること。
2. 実習生は、園全体あるいはクラスの担任の具体的な子どもとの遊びの中で、自由活動時の意義及び教師の指導のあり方を学んでいる。
3. 幼児中心に展開する活動の中で、実習した学生で

も実習以前に、又は期間中に教え派→遊び派への保育観の転換が行なわれない時には、自由活動時によき学びは得られない。

4. 協力園の自由活動時の指導の中に「全体をみるように」というのと「危険のないように」という言葉が多いのに気づいた。学生の大部分はこの言葉の重みを感じて熱心に実行しようとするあまり、子どもひとりひとりの生き生きした活動を見ずに過ごしてしまうものもある。将来の保育者の資質に必要なことを目標におき乍ら幼児ひとりひとりの観察や、幼児と交流して遊ぶことから始めさせたいと考えるが問題が多い。今後の課題としたい。
5. 実習生のうち短期間に望ましい成長をとげたものについてみると、⑦ 保育観の転換に本人が大いに苦しんだ後、⑧ 子どもの遊びの素晴らしさに目が開けた。⑨ 担任教師の姿・活動に理想像を見いだした。⑩ (小さいことであるが) 何度も子どもとの交流や遊びの中で、遊びが発展する事実を見出し、自分もそれに関わった喜びを感じた。⑪ 担任の教師との間に「保育」に関わる応答が重ねられている。以上のように考察の結果をまとめることができる。

事 例

A (結果2) 実習後の調査から

実習を経験し、自由活動の時間は子供達そして幼稚園の教師たちも大きく伸び伸びと遊ぶべきであると思います。その個人個人または仲間と遊ぶということは、これから大きな社会に次々と出ていく子供達にとって大切な時です。今の社会では遊ぶ時間などほとんどないのかもしれない。その中で、幼児に適切な遊具や大人がいるということは本当に絶好のチャンスだと思われます。そしてその教師はその子供達と遊ぶことにより子供達の生活を同時に経験し子供達の可能性をうまく引き出してあげるのです。自由活動は本当にどの子も自由に遊びます。その子供達を暖かく見守り、目を光らせる教師自身にも最も大切な時間だと思います。保育学などで学んだ誘導保育はとても感銘をうけて聞いていました。そして実習を経験し、まさに自由活動の中でそれが行なわれているのを見、また自分でもいくらかそれに近いと思われる実習をしてきたつもりです。これがすべてというわけではなく、子供達の生活に合わせて取りいれるところがよいと思いました。勿論難かしきもとてもよくわかりました。

一略一 また指導案通りにはいかないこと、またそこから離れてしまっても何か子供達の中に取り込まれていることが必ずあると考えています。

B (結果5) 教育実習日誌より

6/7(学生) 自由保育の難かしきと奥深さを感じました。どのように言葉がけをして遊びにはいっていいのか?遊びを離れる時はどのようにしたらいいのか?どの程度まで幼児自身に任せていいのか?など、時と場合によって対処することができるようになるまで大分時間がかかるような気がします。(担任の指導・助言)よく子供をみてひとりひとり違うことをわかって下さい。幼児の活動などは、そこに先生がどうかかわったかなども一緒にできるだけくわしく記録しておくとうろしい。一日誌の中の他の記述から—Sちゃんの話は、会話をSちゃんからひき出すようにしてみてください。

6/9(学生) 今日は午前中園庭で遊びました。最初いろいろな遊び場へ点々と歩いていましたが、泥だんごを作っているところへいくと「先生に泥だんご投げちゃえ」と投げてきました。「お砂が目にはいたら痛いからやめましょう」と言うときすぐ止めました。次に高鬼の仲間にはいってやっていると、私をつかまえて逃がさないようにしようといって乱暴に扱われました。「おまえっ」と云われて……略……冷静に対応すること、幼児の言葉使いを正しく注意もしなければいけないと思いました。なかなか個人個人を見るのは難かしいですが、少しずつわかるようになるろうと思います。先生の活動(子供へのかかわり)をあまり見られなかったことを反省します。(担任の指導・助言) ずいぶん今日は楽しそうに遊んでいましたね。一緒に遊んでいる時、私たちは子供たちの仲間であり、やはり教師でもあるのです。遊びの中で多少言葉が荒っぽくなってしまったりするのはまあしかたがないとしても、やってはいけないことはやはり押さえておかなければいけませんね。「それはやめて」など、短かい言葉でキッパリ言う方がよいと思います。遊びの中で軌道修正して行くことが大切ですね。

今後の課題

今後も幼稚園教育実習のあり様を概観し、全体を見つつ、問題点を浮きぼりにし、教師養成のカリキュラムの在り方に反映させていきたい。